市民プレス

SHIMIN PRESS

7月5日　第57号

発行人　特定非営利活動法人「市民フォーラム」
編集人　原　昭二
制作　デジタル工房
E-mail　hara@camelianet.com
TEL　090（3048）5502
〒353-0004　埼玉県志木市本町2-4-43

市民の目線で市民が発信する地域情報紙
WEB SHIMIN
http://shimin.camelianet.com

CONTENTS

-PAGE 1
地域のニュース＆ギャラリー（1）
柏ノ城に在った？
大石館の高閣「万秀斎」の謎！
-PAGE 2
歴史を繙く：詩僧、万里集九が滞在した・・・
太田道灌の江戸城と楼閣「静勝軒」
-PAGE 3
江戸の原風景を探る
-PAGE 4
地域のニュース＆ギャラリー（2）
―明治時代の剣豪―
稲田八郎と剣道場

地域のニュース＆ギャラリー(1)

浦安の舞

とき：平成二十四年五月十日
ところ：志木市本町二丁目
敷島神社境内

敷島神社の大祭で荘重・典雅な「浦安の舞」が奉納された

浦安の舞は、近代に作られた神楽で、昭和天皇の御製「天地の神にぞ祈る朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を」が歌詞として使われている。

緋袴を着けた、伝統的な白地の装束で、檜扇と鈴を持って踊る本格的な群舞は、敷島神社の大祭に豪華な彩りを添えた。

下宗岡の文化財を訪ねて

とき：平成二十四年五月十三日（日）
「志木のまち案内人の会」・志木市教育委員会主催のテーマ「水と生きる水を生かす 今・昔」

下ノ氷川神社

観応二年（1351）九月に上宗岡の氷川神社（上ノ氷川神社）を分祀したものと伝えられる。

その時、上ノ氷川神社にあった茶臼を二つに分け、上石に「観応二年」の年暦を刻んで神殿の床下に埋め、真上にあたる社殿内に幣帛の御神体を祀った。多くの社寺が南面または東面しているのに対し、下ノ氷川神社は北面している。上ノ氷川神社と向き合い、氏子の村人を守ることを念願したものとされている。

昭和六十一年秋に改築された社殿の中には、江戸期のものを含む数多くの絵馬が収蔵されている。

篭嶌門樋

江戸時代の絵図にも記され、また『武蔵国郡村誌』（明治八年刊）には「籠嶋圦樋」と記載されている。明治二十八年（1895）五月、木製から、石積みのアーチ型樋門に造り替えられ、「篭嶌門樋」と名付けられた。新河岸川の旧堤防に造られて、通常は用水の落し水などを川へ流し、川の水嵩が増すと観音扉が閉まって、堤内への浸水を防ぐ。

篭嶌門樋は、当時の入間郡宗岡村が県の技術指導と県税の補助を得て建設した。下流側には、現在スライドゲートが取り付けられているが、当初は木製の観音開きの戸で、戸の上の石に「篭嶌門樋」と刻まれた。アーチの石組みは、五角形の切石積み、西洋の煉瓦・石造り建築にみられる方式で、日本古来のアーチとは異なっている。石造りのアーチ型樋門としては県内唯一のものなので、志木市の文化財として指定すべきだ、という声が高い。

柏ノ城に在った？ 大石館の高閣「万秀斎」の謎！

時代は中世に遡る・・・

川越城と江戸城とをほぼ同時期に築いた太田道灌は、関東一円を疾駆して勝ち誇った武勇の人だが、文芸にも秀で、詩歌を嗜む文人たちと交流した。

武人と文人との交流によって

道灌は、文明十七年（1485）に、京都で修行した高名な詩僧を東国の江戸に招いた。その名前を万里集九（「しゅうく」と読む人もいる）という。彼は麹町台地に築城された江戸城に滞在し、城内の楼閣からの遥かな眺望を詩に詠んだ。また故あって、大石氏の館に建つ高楼を「万秀斎」と命名し、そこからの眺めをも詩文に托した。

大石氏の城館には・・・

そのころ東国を巡歴していた修験者の道興が招かれ、高楼からの眺めを七言絶句に詠んだことは本紙の前号に詳しく紹介した。館の主、大石氏は信州から多摩地方に進出したので、その本拠は現・八王子市付近に在った。したがって道興が訪れた館の所在地は、当初八王子市とする説が有力であった。

しかし後に、道興が訪れた大石氏の館は、支城として築かれ、志木市にその遺跡が残されている「柏ノ城」（この名称は通称で、後世につけられた）に違いない、とする説が有力になり、当時の城主は十一代顕重であることがほぼ確かめられた。

詩僧万里の詩文は・・・

先に述べた万里が命名し、そこからの眺望を詠んだのも『**大石氏の館**』の高楼からなので、その館も志木市の「柏ノ城」ではなかろうか、という見解が成り立つのは当然であろう。ところが問題点の第一は、江戸城に滞在していた万里に高楼の命名を依頼したのは、当主の大石顕重ではなく、嫡男の定重記してみよう。

だった。しかも、大石氏は八王子市から志木市に向かって複数の城館をもっていたことを想起すると、高楼を柏ノ城のものと短絡することは危険である。では一体、どの城館なのだろうか。

志木市史通史編と中世編によれば・・・

長享元年（1487）、大石定重は万里集九に館亭の命名を依頼して「万秀斎」の名称を得る、と記されている。この人、定重は当時二十才だった。

万里が著した漢詩文の東国旅行記『梅花無尽蔵』巻二の一節（訓読）につぎのような記述がある。

丁未（長享元年）**武蔵所作**

万秀斎の詩、叙は別巻に見ゆ、武蔵目代大石定重之を請い、図工に命じて其の斎を図す。尸樹は東南にして飛鳥は西、江山鐘秀で看る毎に迷う、歓声尚在り簾を捲きて久し、菊戸春を耕して雨一犂。　＊注釈 尸樹　並木のこと

図工に命じて描かせた、その館亭からの眺めの画を見て詩文を作って欲しい・・・という文面である。

注：文明十九年、疫病が蔓延したため、その年七月「文明」から「長享」に改元された。因みに道興が訪ねたのは、その前年の暮れから翌年始めにかけてであった。

また巻六には・・・

「万秀斎詩序」として

武蔵刺史之幕府、有爪牙之英臣、是曰大石定重、廼木曽源義仲十葉之雲孫也、武之二十余郡悉属指呼、忠義貫日、始終一節、規勝地於武蔵、頗設墨壁之備、・・・・・・・・

以下長文なので省略するが、この詩文の大意を

次ページ下段に続く

大意：武蔵国の長官の本営には勇気と力をもった優れた家臣がいる。大石定重といい、木曽義仲十代目の子孫で、武蔵国の二十余郡をすべて掌握している。その忠誠は終始一貫している。景勝の地を選んで測量し、堅固な土塁・城壁の備えを設け、近頃亭を築いた。

西方に富士山の万年雪、東方には果てしなく霞が漂っている。南方は平野となって松原が望まれ、涼風が吹いて自然の調べを弦の無い琴の上で奏でている。東北方には湖水と二つの村と筑波の峰々が望まれる。朝にも暮れにも快く、まるで新しい発想の図画を掛けたようである。これを開けば、素晴らしい景色は八景に極まる。ところがこの地では違う。一度簾を巻いて十景・二十景、いやそれ以上で、いうなれば果てしない谷は流れを争い、無数の岩は美しさを競って譲らないのである。定重は仲介者を通してこの亭の名をつけて欲しいという。そこで万秀と命名した。犬はのんびりと横たわり住民は平和を謳歌しており、これをよしとしたのである。

大石氏の館跡とされる志木市立第三小学校の4階からの遠望

崖下には志木市立中学校の校庭、遠景左手は柳瀬川堤防の奥に富士見市水谷の台地の縁辺、右手には、遥かにさいたま市と新都心の高層ビル群が展望できる。

詩僧、万里集九が滞在した・・・
太田道灌の江戸城と楼閣「静勝軒」

詩僧、万里集九は・・・

永正三年（1506）、漢詩文の東国旅行記『梅花無尽蔵』7巻を完成、当時の動向を生き生きと今に伝える貴重な記録となっている。

万里は正長元年（1428）、近江国に生まれた（没年不詳）。京都の東福寺で僧となり、相国寺雲頂院で修行した。しかし応仁の乱（応仁元年<1467>～文明七年<1477>）で相国寺が焼失したため近江に逃れ、還俗して美濃国に住む。荒廃した世相に堪えて文学に対する執心を堅持し、詩を詠む禅僧との交友は、彼の知名度を高くしていった。

武蔵の武将と詩僧との交際はじまる

文明十二年、太田道灌が家宰をつとめる扇谷上杉家の当主、定正に依頼されて、「贋釣斎」の詩をつくっている。

「関東の上杉修理太夫の鎌倉旧栖の地は扇谷という。相州にその斎（亭）有り。贋釣と号す。介者をして詩を需めしむ。余、東遊以前、これを作る」（詩文は省略）と記され、その後万里と関東の武将たちとの交渉が密になっていったようだ。

太田道灌との交友は・・・

同十七年、万里は依頼されて太田道灌のために「静勝軒」の詩を作ったが、二人の交友は次第に進んで、ついに道灌は彼を江戸城に招聘することになる。そして二年にわたって万里は江戸に滞在、城主らとの交友の日々を過ごしたのである。

文芸に秀でた太田道灌

道灌は幼名を鶴千代といい、『永享記』（成立年代・作者ともに不明だが、軍記物としては文学的な潤色も少なく、全体が公平な立場から実録的に書かれているという）などによると、鶴千代は鎌倉五山（一説によれば建長寺）で学問を修め、足利学校（栃木県足利市）で学び、すでに幼少のときから英才ぶりが世に知られていた。のちに諸書を求めて兵学を学び、また軍師として必須の教養であった易学を修めた。歌道にも精通しており、文芸をも愛好する人物だった。

江戸城に移る前のことであるが、彼は品川に居宅をもち、文明元年（1469）から同八年にかけて、著名な歌人の心敬をしばしば品川の館に招き、連歌会を催し、この会は「品川千句」として世に知られる。

江戸城内ではしばしば文人の集まりが催され、文明六年、道灌四十三才のときに開かれた歌合会は、「武州江戸歌合」としてよく知られている。

江戸城内の「静勝軒」で歓迎

万里が江戸に到着した翌日（十月三日）、城内で歓迎の晩餐会が開かれた。その会場は丘の上に建てられた静勝軒で、万里は江戸に向かう以前に、依頼されて、この高楼からの眺めを詠んでいる。なお、本丸に設けた居宅、静勝軒の背後に、眺望の優れた高閣が在ったことは、『江戸城静勝軒詩序并江亭記等写』（作者は臨済宗黄竜派の禅僧として知られている正宗龍統（正長元年<1428>～明応七年<1498>））に記されている。

宴の席についた万里は・・

静勝軒からの眺望を楽しみ、「窓を開くときは、すなわち隅田河、東に在り。筑波山、北に在り。富士、諸峯に出ず。三日程の西に在り。その東南に向かいて、海波万頃なり」と詩に詠んでいる。

つづいて九日に開かれた宴会には、太田道灌の主人に当る上杉定正が来臨して宴が開かれ、「相州太守の宴に陪す。はじめて道灌公の舞を見る」と記している。その原文は・・・

銀燭添光月漸円 相州太守夜臨筵
春風袖暖婆娑舞 旅鬢忘労意欲仙

『銀燭、光りを添えて、月、ようやく円かなり。相州太守、夜、筵に臨む。春風、袖、暖かに、婆娑と舞う。旅鬢、労を忘じ、意、仙ならんと欲す』。

銀燭の下、威容を湛えながら、衣の袖を翻して舞ったであろう道灌の姿は万里の目にどのように映じたであろうか。今までの旅の疲れを忘れ、仙界の人になろうかといった気持ちだと万里は詠じているが、あながち誇張された印象とは言えまい。

十四日にはやはり静勝軒で歌披講（歌会で、形式に従い節づけして披露すること）があり、万里を迎えて、太田道灌を中心とする人々の文学活動はさらに活性化していった。万里は鵜沼を出発して以後、江戸城に入ってからも十月晦日まで日課として七十八篇の詩を作って、文学への意欲を燃焼させている。

参考資料　中川徳之助：万里集九（日本歴史学会編・吉川弘文館）

『梅花無尽蔵』は・・・

万里が著わした詩文集の標題で、上記した江戸城での歓迎の宴などが収録されている。この書では、作品が年代順に編集され、注も加えられているので、数多の見聞記録は、歴史的な史料として貴重なものになっている。

次ページ上段に続く

CG画像
当時を推定して制作された太田氏の江戸城

太田道灌の築いた江戸城

江戸城の築城は康正二年（1456）に着手され、翌長禄元年四月に完成したといわれる。そのとき道灌は弱冠二十六才だった。

海岸線は、当時の平川郷、桜田郷辺りに迫り、入り江の海辺に沿った台地上に城が築かれた。そのころの江戸城については、正宗龍統の『江戸城静勝軒詩序并江亭記等写』や、万里集九の『梅花無尽蔵』によってある程度までは推測でき、「子城（根城とも本丸ともいう）」「中城」「外城」の三重構造となっていて、周囲を切岸（斜面を削って人工的につくった断崖）や水堀を巡らせ、門や橋で結んでいたとされる。太田道灌は、本丸に「静勝軒」と呼ばれる居宅を設け、背後には眺望の良い高閣を建てたという。

前ページ下段から続く

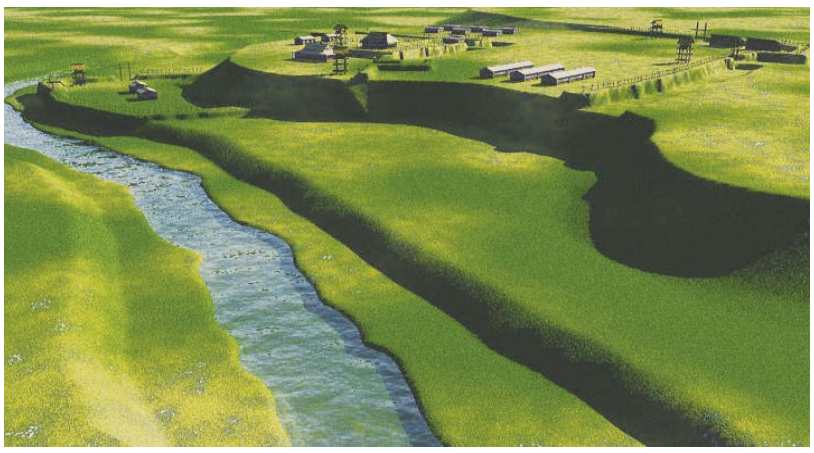
「万秀斎」は果たして柏ノ城に在ったのか？ とすれば道興も同じ高楼からの眺めを詠んだことになる！

大石定重が依頼して、万里はその眺望を詩文に認めたのであるが、高楼の所在地は一体何処だったのか。萩元家義は「郷土志木」2号で論じている。

万里によって名付けられたのは、文明十九年（長享元年）と推定されるので、道興准后が定重の父親、顕重の館を訪れたときとほぼ期を一にしている。ところが道興の廻国雑記の行文には、嫡男の定重について触れた記述が全くない。もし父子が同居していれば、定重についての記述があってしかるべきではないか。定重が父顕重から依頼されて代行したのだろうか。

大石氏の居館は八王子から志木に向かって展開されたので・・・

すでに成人になっていた定重は、父の顕重と別居して、他の城に住んでいたのではないか、その郭内の高楼ではないか、という推測も可能なのである。では、居館からの眺望が、万里の表現と一致する城館はどこか。


CG画像　柳瀬川上流から見た柏ノ城　城址は右岸の台地上にある

山内上杉氏の重臣で武蔵国の守護代だった大石顕重は、長禄二年（1458）丘城の「高月城」を築城し、主城としたと伝えられる（その城址は現在、八王子市高月に所在する）。そこで嫡男の定重は、そこに高楼を建てたのではあるまいか、との推測である。では

高月城址の高処から、四方を眺望してみよう。だが、南方と北方の眺めは、万里の詩文の情景には当て嵌らないようだ。大石定重はその南に滝山城を築城したが、それはずっと後となる永正十八年（1521）のことになる。

強いて「万秀斎」のあった城館の候補を求めれば、柳瀬川に沿った所沢市城の「瀧ノ城」（本郷城）となろうか。それではそこからの眺望について検証すべきであろう。

かつては瀧が流れていた瀧ノ城

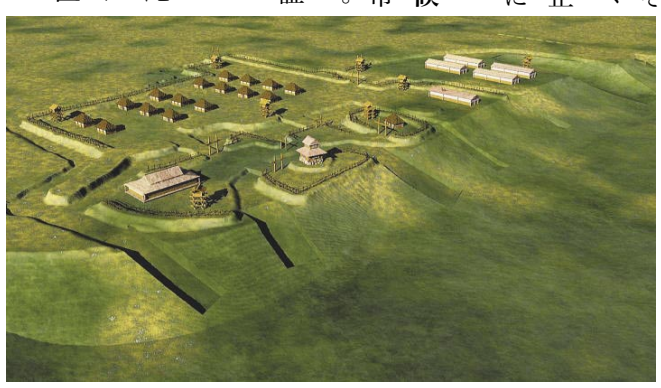
その城址（埼玉県指定史跡）は、比高二十メートル余り、柳瀬川の流れを眼下に見下ろす急峻な崖上に位置し、東南に面した本丸、二の丸、三の丸、櫓などの遺構がいまも残されている。

しかしこの城と定重との結びつきには不明なことが多く、大石氏が造営したとされてはいるが年代は不明で、のちに北条氏（大石氏と養子縁組したのち、姓を戻して大石氏を配下にした北条氏照）に占拠された。北条氏は入念な城館づくりによって改造したので、現在の城址に大石氏の名残りは皆無に近い。決定的ではないが、眺望される山水の方角において、志木市の城館跡地に分があるのではあるまいか。

万里は大石氏の城館を訪れて直接定重と会ったか？

という疑問に対して、志木市史では、依頼された詩文の眺めが非常に具体的なので、訪問したに違いない、という論調で記しており、ここでは、高楼の「万秀斎」は志木市の「柏ノ城」の一角に建ち、遥かな遠望が詩文に詠まれた地点を、志木市立第三小学校の校庭の一角とする推測はもっとも有力、という結論で締めくくっておきたい。

瀧ノ城々址から柳瀬川を見下ろす。画面の右手奥に高架のJR武蔵野線を望む


CG画像　柳瀬川上流から見た瀧ノ城

前ページ中段から

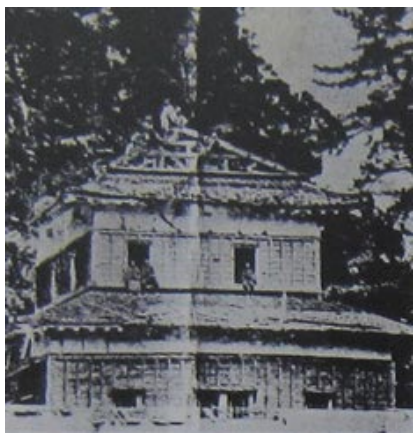
万里は都を離れてから、美濃・尾張を転々としていたが、文明十二年（1480）、美濃国鵜沼（岐阜県各務原市）に庵を構えて定住した。この住まいは 梅花無尽蔵と名付けられ、詩作に没頭した。庵の名前がのちに詩文集の名称となったようだ。

高楼からの眺めを競い合う

大石定重が大石氏の館に「万秀斎」を構えたことは、すでに前ページに記したが、太田道灌は江戸城内に人々が集う高閣、静勝軒を構築して、望楼からの眺めを誇ったのである。万里が著わした詩歌の数々から、当時の風潮を窺い知ることはできるのであるが、一体それらの高楼は、どんな姿の建造物だったのだろうか。もっと具体的な姿に迫ることはできないだろうか。

静勝軒は明治時代まで残っていた?

手掛かりの一つが、千葉県佐倉市城内町の佐倉城址公園内の『銅櫓跡』と記された説明板である。「この写真は明治初期に撮影されたもので、木造、銅瓦葺、六間（約10・9m）四方、二階造り、江戸城吹上庭園から移築したものであるが、もとは三層で太田道灌が造ったものと云われている」と記されている。



佐倉城址公園内の『銅櫓跡』に立つ掲示板の写真

「徳川実記」に拠れば、寛永六年（1629）徳川家光は、庭園の造営のために不要となった三層の楼を土井氏に賜ったので、佐倉に移して天守としたとある。

佐倉城は江戸時代初期の慶長十五年（1610）、佐倉に封ぜられた土井利勝によって築造された平山城であったが、残念なことに、明治維新後、ここに陸軍歩兵第二連隊が置かれたため、櫓や門などがすべて取り壊されてしまったので、今は無い。この写真をよく見ると、屋根に登って作業をしている人の姿があり、奇しくも取壊しの最中のようだ。

現在の皇居に建つ富士見櫓は…

江戸城が北条氏の所有となってからも、道灌の静勝軒は遺されていて、「富士見の亭」と呼ばれ、また、現・皇居の「富士見櫓」がその跡地ではないか、との伝承もあるようだ。

「櫓（やぐら）」とは、倉庫や防御の役割をもち、江戸城には十九の櫓があった。今の皇居には、二重櫓の伏見櫓、桜田二重櫓、三重櫓の富士見櫓の三つが残るのみであるが、かつて櫓の建設は、東国の守護・守護代クラスの城郭に大きな影響を与え、天守閣の走りでないか、と考える識者も少なくない。江戸時代には、将軍が両国の花火や品川の海を眺めただけではなく、明暦の大火（1657）で消失した天守閣の代用として使われたともいわれている。

皇居の「富士見櫓」を遠望

この人、万里集九は・・・

万里集九が江戸城に到着して間もなくのこと、文明十八年（1486）六月、太田道灌の父、太田備中入道道真の居館であった武蔵国越生（おごせ）（現・埼玉県入間郡越生町）の「自得軒（じとくけん）」で詩歌会が催された。万里はここに招かれて詩歌を詠んでいる。しかし、この会から一月後の七月、道灌は上杉定正邸で誅殺された。

万里は道灌の霊前に祭文を読み、のちにしばしば道灌に対する傾倒と敬愛の情を捧げている。長享二年（1488）の焼香の一篇では、「東遊遠しといえども、君、招くがためにす。冤血（えんけつ）、端（はし）無く、九霄（きゅうしょう）に濺（そそ）く」ということばには、沈静した、しかも悲痛な情念が感じられる。

江戸での滞留に見切りをつける

道灌が謀殺されてのちも、扇谷上杉家当主の定正に引き止められて江戸城に滞在していたが、長享二年六月に起った山内、扇谷両軍の菅谷原の合戦は熾烈をきわめ、戦死者は七百人を越え、軍馬の死も数百疋（ぴき）に及ぶという状況だった。彼は時期の到来を感じ、帰国を決意する。

かくて同年八月十四日の辰の刻、すなわち現在の午前八時に、朝食をすませた万里は江戸城を発ち、その日の夕方、白子（現・和光市）に着いて宿泊した。この際、数十騎の武士（真俗）が、彼の身辺を警護するためか、それとも別れを惜しんでか、江戸から七、八里の地点まで送ってきたのであった。

『梅花無尽蔵』巻二より

長享竜集戊申八月十有四日、辰則（刻）蓐食出武蔵江戸城、数十騎之真俗、送余七八里、鞍上聴十鴻云、今朝避乱出江城 熟面雲山送我行 驢瘦吟鞭敲不進 始聞鞍上十鴻声 此夕宿白子里

訓読すると：長享竜集戊申（つちのえさる）八月十有四日、辰の刻（とき）に蓐食（じょくしょく）し武蔵江戸城を出（い）づ。数十騎の真俗（しんぞく）、余を送りて七八里、鞍上十鴻（あんじょうこう）を聴きて云わく、今朝乱を避けて江城（こうじょう）を出づ。熟面の雲山、我が行を送る。驢（ろ）は瘦せ鞭を吟（なら）して敲（たた）けど進まず、始めて聞く鞍上十鴻の声、此の夕べ白子の里に宿す。

・・・・・・・・・・・・

この七言絶句は、馬上の万里が、途中で「十鴻」すなわち「こうのとり」の群が鳴く声を初めて耳にして感銘をおぼえ、それを表白したものである。こうのとりは鶴の一種で高樹や殿堂に巣を営み、往古は武蔵国にも棲息する数が多かったという。

なお、当時、白子（現・和光市）が江戸から川越に至り、さらに武蔵北部へ通じる街道の宿駅であったことがわかる。整備されて後に川越街道となる。

江戸の原風景を探る

「日本橋台地」ともいわれ、両側の付け根には河口（入江）をもち、西側は「日比谷入江」で、江戸城が築かれた台地の東端を廻って「平川」が海に注いでいた。しかし、平川はのちに付け替えられて、江戸前島を東に向かい、「神田川」と「日本橋川」の原型になったと考えられている。

江戸湊と浅草湊

もう一つは旧石神井川の河口で、「江戸湊」と呼ばれることもある（かつては港湾のうち水上部分を「港」というのに対して、陸上部分を「湊（みなと）」と呼んでいた）。

石神井川は練馬区の石神井公園から板橋区の南を流れ、いまでは北区滝野川に入ってから、JR王子駅の下を流れて隅田川に注いでいるが、本来の川筋は、飛鳥山西側から千駄木－根津－不忍池－湯島－須田町－神田［お玉が池］－日本橋堀留に至る河川で、前島東岸の海に注いでいた。

またかつては「入間川」（現在は隅田川）の河口に当る浅草寺を中心とする一帯も「江の戸」だった。そこで海岸づたいにこの入江に辿りついた渡来人たちが、ここから武蔵国の内陸部に進出していったことが知られ、日比谷入江、江戸湊とともに繁栄していた。「浅草湊」として確かな存在であったことは、『吾妻鏡』などの文献に照らしても明らかなようだ。

なお中川（古利根川または古隅田川）の河口と多摩川河口の品川湊についても触れるべきかもしれないが、ここでは省略して物語りを進めることにしたい。

以下次号につづく。

江戸前島がつくった日比谷入江

下図の「江戸前島」に注目したい。本郷台地の先端が海と川の浸蝕で削られた低地で、半島として海上に突き出している。

「江戸」という地名は・・・

鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』にはじめて記されたので、平安時代後半に発生した地名とされている。いくつかの説が知られているが、もっとも有力なのは、江は川あるいは入江とすると、戸は入口を意味するから「江の入り口」に由来するというものである。

当時の江戸は、武蔵国と下総国の国境である隅田川の河口の西に位置し、日比谷入江と呼ばれる入江が、台地の上に築かれた江戸城の間近に入り込んでいた。

「千束池」、「姫が池」は現・台東区に、「白鳥池」は現・文京区に、「日比谷入江」、「お玉が池」は現・千代田区に所在した。「三崎」：日比谷入江に突き出した岬（みさき）が語源（千代田区町名ガイドに拠る）で、かつて三崎村と呼ばれ、現・JR水道橋駅付近に所在する「三崎稲荷」は鎌倉時代の創建と伝えられる。

「田安」：かつての田安郡には、「田安稲荷」が祀られていたが、後に平将門ゆかりの「築土（つくど）神社」の兼務社となっている。江戸時代には「田安門」がつくられて、江戸城の北の要めとなる。「将門首塚」：千代田区大手町一丁目に在って、京で曝された平将門の首が夜空に舞い上がり、落ちたとの伝承があり、東京都指定の旧跡として知られる。

愛宕山（あたごやま）：標高25米余り、江戸時代には素晴らしい景観を望む地点として著名だった。「尼店（あまだな）」：現・日本橋室町一帯で、江戸時代には漆器問屋街で知られた。「江戸湊」：消費物資の流通拠点で、江戸時代以後一層繁栄した。江戸前島周辺は、中世には、浅草や品川湊と並ぶ武蔵国の代表的な湊で、かつての入間川（現・隅田川）、旧石神井川などの河口に近く、北関東の内陸部から水運を用いて鎌倉・小田原・西国方面に出る中継地点ともなった。

太田道灌の時代には鎌倉街道と浅草を結ぶ道路が江戸城と平川に沿って東西に走り、その付近に城下町が形成された。ただし『東京市史稿』では「日比谷入江」を 江戸湊としているので注意する必要がある。なお当時の石神井川は、のちに上流の「谷田川」が王子付近から荒川（隅田川の上流）に繋がれ、旧石神井川は現在は消失している。

中世の江戸の地形を推定した図（江戸の原型）

地域のニュース＆ギャラリー(2)

志木市田子山富士保存会の再発足

お富士さんをみんなの手で

田子山富士塚

平成18年3月17日 埼玉県指定
有形民俗文化財
ところ：志木市本町二丁目1705
とき：明治5年（1872）6月築造

敷島神社境内地の北角に、明治2年10月から明治5年6月にかけて築造された富士塚で、高さ8・5m、円周125・3m、斜度39度の丸みのある方形をした築山である。

富士塚とは、富士山を模して築かれた人造の小山で、市内ではこの他にもう一基宗岡地区の浅間神社にも富士塚がある。

志木市「田子山」には、古くから古墳といわれてきた小山があり、富士塚は、その上に三十三尺（約10m）の土を盛り、2年8ヶ月の歳月を経て完成した。

築造の発起人は、当時、引又宿（現：志木市本町）で醤油醸造業を営んでいた高須庄吉氏で、後に富士講の先達となったほど熱心な富士講信者であった。

今も残る多数の石造遺物からは、築造工事にあたり実に県内97町村、東京43町村、講中を除いても2416名もの寄進者がいたことが分かる。寄進者として、当時の有名な歌舞伎役者である岩井半四郎、尾上菊五郎を始め、引又河岸の舟運関係者や深川、神田、川越、蕨など隅田川、新河岸川流域の講中などが名を連ねている。

その山の規模もさることながら、石造遺物の数と種類、細工は他の富士塚と比較しても並みはずれて優れており、当時の引又宿の経済力と近在の人々の富士山信仰への思い入れが窺われる。

引又河岸の大店の繁栄や富士山信仰の熱意を知る上で欠かすことのできない大変貴重な文化財である。

保存会の総会と新年度事業計画の審議

4月15日（日）午后、保存会の総会が敷島神社社務所で開催、新年度の事業計画が審議された。会長に清水良介、副会長に池田栄次、深瀬克氏が選出され、事務局は志木市商工会事務局内で電話：048-471-0049。

―明治時代の剣豪―

稲田八郎と剣道場

王政復古から間もない明治の初め、当時は新座郡「志木宿」といわれていた街の一角から、連日激しい気合いが響き渡っていた。現在の本町三丁目のバス通り裏手（「上町」）の一角、門弟数百人を擁する剣道場「養気館」からの、猛稽古による気合いである。

以下「志木市史通史編」を参考にして、この人「稲田八郎」の活動を偲ぶことにしたい。

稲田八郎は天保十三年（1842）正月、江戸神田に生まれ、幼少から本郷森川町の岡田十内の門に入った。その技は群を抜き神童の異名をとったという。十内は武州足立郡下戸田（現・戸田市）の人で、藤堂家屋敷の一角に道場をもち、同家の剣道師範を勤めていた。

柳剛流剣術は「柳の靡くような柔らかさを剛とする」を標榜する剣法で、心形刀流の岡田惣右衛門が一派を開き、神田お玉ヶ池に道場を開いたのが始まりとされている。技術的には「足を撃つに妙を得」とあって、初撃に相手の足を切って戦闘力を奪うもので、いわば実戦的剣法である。

新興流派ともいうべき柳剛流は、剣のほかに薙刀・居合・棒・杖の諸要素を組み入れた幅広い混合武術の形態をとり、宗家の統制も比較的ゆるく流動的で、免許を受けた門弟たちは各地に分散し、各々が一家の流旗を立て、社中を結成して流勢の拡大を図ったので、関東はもちろん、仙台・伊勢・三河方面にまで広がった。

師の十内から免許皆伝を許された八郎は、維新のさいには彰義隊に加盟して上野の山にこもり、官軍に抗戦しつつ下総・結城・函館と転戦し、縦横無尽な活躍をしたという。しかし大政奉還によって明治時代となり、一変して賊徒となった八郎は、負傷の身を支えつつ、あるときは知人宅に隠れ、あるときは農家の納屋に臥すなど、捜索の目をくぐって新座郡片山村（現・新座市）に巡ってきた。

気骨をもった鈴木某氏の計らいで匿われることになった八郎は、文武両道に秀で、大赦令（明治二年七月）が出された後は鈴木氏一族に支えられた仮の住まいを道場として、近在の若者に剣術の指南をした。

このころ江戸周辺では、一揆や盗難防止を目的に武力による自衛化の動きがみられ、大家では万一に備えて剣術家を雇い入れるなどの防衛策を講じた。県下一を誇る志木宿の大地主西武でも、強盗に押し入られたことがあって、自己防衛の必要にかられていた。そこで剣士の名も高い稲田八郎が警護人として招かれた。

朱鞘の大小を携えた八郎は、片山の鈴木家から西川家へと往来して警護の任に当たる傍ら、若者に剣の手ほどきをした。八郎の教えを請う人々は日々激増し、西川家を始めとする有力者の薦めによって、志木宿に道場が建設されたのは明治九年のことだった。

この年帯刀禁止令が公布され、剣道の衰退期ではあったが、それにもかかわらず道場が開設された

敷島神社境内に建つ顕彰碑

ということは、八郎の人気のほどがうかがえる。道場の開設に先立って、旧幕臣であり剣豪でもある山岡鉄舟が扁額を寄せ、道場は「心を専らとし、気力を養う」として「養気館」と命名されたのである。鉄舟も養気館へ時々姿をみせたという。

養気館は現在の本町バス通りから路地を入った所が正門で、裏門は冨士道の上町郵便局の横を入った辺りに在って、かなり規模の大きな平屋建てだった。玄関を入ると廊下に沿って稽古場（三〇坪位）があり、その壁には段位と氏名を示す木札が掛けられ、下段には薙刀・棒・木刀などが掛けてあった。

柳剛流は修業の簡略化を図り、他の流派と比べて免許を取得するまでの段階や年限が割合に緩やかだというが、それでも修業は厳しく、序・無段・切紙・目録・免許皆伝の順で昇段するのだが「切紙」の取得には早くて三、四年を要すると言われ「切紙」を許されると、入門者に代稽古をつけるほか、師から巻物一巻が授与された。

多くの門弟とともに修業を続けていた嗣子四郎も明治三十年九月、ようやく八郎から「目録」を許され、父の高弟に支えられつつ若先生と称されて師範代を勤めていたが、同三十七年日露戦争の開始とともに出征した。

その後道場はやや低調になったが、同年十二月の帝国議会で、本県選出の星野仙蔵・小沢愛次郎の国会議員（ともに剣士）によって、剣道が中学校の正科に加えられ、剣道熱は盛んになり、剣士を目指す少年の入門が増え、稲田道場も活気を取りもどした。

砲兵軍曹で凱旋した四郎は、明治四十年新たに道場を設立し、名も「養気館」から「明信館」と改めて、面目を一新した。道場も新築して気運も熟す矢先であったが、この年の八月十七日、愛妻「加と」の急逝に遭った八郎は、これを機に道場を完全に四郎に委ねて隠居し、大正二年五月、七十二歳を一期として没したのである。

翌月から四郎を中心とする西川武十郎・石原弥五郎・神山弥次郎・三上喜三郎・西川利三郎・木下常蔵らの旧高弟が発起人となり、恩師の功績を不朽に伝えようと、記念碑建立の運動を展開した。

二十九ヶ町村にわたる広範囲の門人を尋ね、一七九人の協力によって、三一二円余りの寄付を集め、師の七回忌に当たる大正八年五月、養気館からほど近く、八郎が好んで散策した敷島神社の境内に、岡田忠彦（第一七代埼玉県知事）の篆額による「稲田八郎先生之碑」を建立したのである。

顕彰碑の裏面に記された門人ほか寄付者の名簿

門人

鈴木小太郎　細田常右衛門　寺澤孫右衛門　小寺與吉　本橋安太郎　野口七次郎　野川惣五郎
内田哲之助　野口福壽　野口次郎　蓮見源蔵　濱崎　須田良吉　保谷　小山壽平　都築
鍵太　保谷明次郎　榎本又右衛門　並木金太郎　島崎善吉　加藤佐平次　秋元八左衛門　野口貞治　名古屋丑五郎　西林源録　加藤利平　岩崎次郎吉　加藤作左衛門　蓮見俊太郎　土支田
加藤幸三郎　池上善兵衛　吉川岩太郎　前田民部　岡　比留間嘉平次　大和田　細沼政吉　大井　森田富蔵　片山　中里萬蔵　要輔　篠　新吉　大橋岩吉　本
竹間澤　田善治郎　砂川千代吉　須田友太郎　渋谷榮太郎　宗岡　内田卯之助　篠　根岸　高野勘治　南畑　前
多瀧蔵　金子源四郎　清水重左衛門　上内間木　野島彌十郎　野火止　成田昌平　浅野彌右衛門　齋藤佐太郎　須田作一郎　三
島村光太郎　小泉伊平次　新井宇兵衛　石田弘平　清水宗太郎　清水美治　山本吉五郎　並木彌惣次　新井彌太郎
輪　金兵衛　一ノ瀬宇兵衛　福岡　吉野彦太郎　柳川岩松　柳川孝太郎　柳川重蔵　簑輪治平　二ッ宮　森　瀧蔵　小樽　田中源
蔵　鈴木利三郎　内堀卯之助　永井喜代治　加藤藤吉郎　平野嘉平　稲垣平助　保谷平太郎　浅久保　田中重雄　宮戸　高
橋庫二　溝沼　大畑榮助　鈴木幸十郎　相川喜代蔵　橋本喜代治　塩味松太郎　岡野幸八　渡邉利平
山田治兵衛　水宮金吾　島根　石神井　栗原鋤三　豊田春陽　田中半左衛門
郎　藤折　大畑榮次郎　高橋國太郎　河合五郎兵衛　佐伯初五郎　小川源三郎　朝賀忠善　櫻井平助　本橋與五
本忠三郎　宮崎要蔵　井口錄蔵　井口菊次郎　井口彌市　高橋佐市　田中清三郎　橋本泰蔵　島崎平蔵　鈴木政吉　橋
橋本太一　井口又右衛門　橋本金太郎　小美野亀之助　保谷玉三郎　橋本義一　田中源蔵　菅澤　長谷川松五
郎　三上権兵衛　西田久五郎　村山　西込戸新八　櫻井仙蔵　西山宗十郎　秋元藤太郎　村山勇次郎　池田きん　志木町　西川武十
郎　金子與七郎　須田利三郎　西川市太郎　尾間木　鈴木仙太郎　木下常蔵　三枝富吉　神山貞太郎　井口正治　井口彌兵衛
彌次郎　西川義三郎　横　内義隆　高橋作次郎　小山正治　東京　野島平蔵　石原花吉　村山彦吉　真島尚助　神山
金三郎　三上春吉　森田松太郎　織田正治　三上恒四郎　篠澤源次郎　井下田準一郎　中村松次郎　三上喜三郎　久保田伊助　上原百太郎　飯田岩三郎　武藤
次郎　星野角蔵　渡井武一郎　西川信光　小寺倉吉　大野伊三郎　細田洋　池内慶太郎　土屋河次　神山保
幹事
西川武十郎　西川利三郎　木下常蔵　神山彌次郎　三上喜三郎　真島尚助　高橋國太郎　石原彌五郎
村名いろは順

特定非営利活動法人
NPO「市民フォーラム」

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行ない、報道によって市民の公共参加を推進します。また市民間のコミュニケーションの増進に努めます。

地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布しています。
読者の「オピニオン」（意見・感想）をお寄せ下さい。

TEL 090（3048）5502
編集部原宛にどうぞ

本紙「市民プレス」は年四回（一、四、七、十月、各五日）発行。